慈光

第八卷　第五號

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十一年五月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第八十六号）

目次

「仏が救うて下さる」……花田正夫…(1)
近角先生の御一生を追憶して……福島政雄…(4)
弟子と子……榊原徳草…(7)
ヂヤータカ物語……南傳大蔵経…(11)

『佛が救うて下さる』

花田正夫

釈尊の出世の本意は、ただひとつ『弥陀仏が救うて下さる』ということを説かれようがためでありました。

三国の七高僧のお出ましも、釈尊のこの本意を明らかにあらはして『弥陀仏の本願ばかりが我等の救ひぞ』と知らせて下さるためであります。

斯様に、如来・聖人が、異口同音に『弥陀仏が救うて下さる』と教へられるのは、我等凡夫に救ひの道が絶えて無いことを見抜かれ、そこを憐れと思召してやむにやまれぬ悲心から仰せられるのであります。

法然上人はひとすぢにこのことを仰せられて

『夫れ速に生死を離れようと欲へば、先づ聖道門をさしおいて、浄土門に入れ。浄土門の中でも雑行をなげすてて正行に帰さねばならぬ。更に正行の中でも、助行をかたはらにして、専ら正定之業をつとめよ。正定之業とは即ち是れ仏の名を称することである。名を称すれば必ず浄土に生れることが出来る、それは仏の本願に依るからである』

と悲引して下さる。この一文を拝読しますと、十五歳にして出家されて叡山に登られた上人が四十三歳にして出離の道において萬策つきはてられたところに『一心専念弥陀名号……順彼仏願故』の善導大師の御勧化に心ひらけ、たちどころに念仏の一門に入られた御一代の縮図を拝することが出来ます。その後、上人が有縁の人々に度々御述懐なされましたのは『順彼仏願故の一文深く身にしみた』とのことでありました。それを選択集に『名を称すれば必ず浄土に生れることが出来る、それは仏の本願に依るからである』と御示し下さるのであります。

親鸞聖人もまた、いづれの行も及び難き身に行き詰られ、その浮ぶ瀬もないところに『ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべし』との法然上人の仰せを信順せられたのであります。

聖覚法印は唯信鈔の中に

『たとへば人ありて、高き岸のしもにありて、のぼることあたはざらむに、力強き人、岸の上にありて、綱をおろして、この綱にとりつかせて、われ岸の上にひきのぼせむといはむに、ひく人の力をうたがひ、綱の弱からむことをあやぶみて　手をおさめてこれを取らずば、さらに岸の上にのぼることうべからず。

ひとへにその言葉にしたがうて掌をのべてこれをとらむには、即ちのぼることを得べし。仏力を疑ひ願力をたのまざる人は菩提の岸にのぼることかたし。ただ信心の手をのべて誓願の綱をとるべし。仏力無窮なり、罪障深重の身を重しとせず。仏智無辺なり散乱放逸のものをもすつることなし。たず信心を要とす。そのほかをばかへりみざるなり』

救ひの綱は下りてゐる。しかも無窮の仏力、無辺の仏智をもつて引きうけて下さる。その本願のたしかさ、力強さを信ぜよ、と懇切に勧められてゐるのであります。

この『仏が救うて下さる』といふことを徹底して知らされることが真宗のかなめであります。私共から言へば、そのことをよく聞きひらくことが、かなめを聞くことになるのであります。

これについて、神戸の実業家であつた、故福間久米吉氏の入信の経路が、如何にもよくそこを聞きひらかれてゐるので、その顚末を述べましよう。

福間氏は広島生れでありましたが、商業学校時代から外国貿易に着眼し、神戸で成功せられたのであります。ところが癌のためにあらゆる療法もその効なく八回の手術で遂に逝去せられたのであります。

ところが令息の甲松さんが、看病中に、どうかして父上に仏法を聞いて貰ひたいと切に願はれたので、菅瀬芳英師、近角常観先生、前田、島地、村上の諸師も招かれて、臨床法話をせられたのであります。

然し久米吉氏の理想は、実業家として活躍された根本は『親孝行したい』ためでありました。ところが病魔のおかすところとなりましたが、自分の病気は成程難病である、けれども中心の願である孝心を完うしたいためであるから、全力をつくして養生すれば、他人に不治な病でも、自分は必ず克服してみせる、といふ意気込みでありましたので毎週一二回訪問して法話される菅瀬師の言葉も一向に耳に入らないといふ始末でありました。

現在名古屋の衆善館長をして居られる三上孝基氏は当時菅瀬師の寮に居られて『菅瀬先生が根気よく通はれても無駄である。それよりも寮の発展策をせられた方が！』などと皆と話し合つてゐた位であつたとのことでありました。

ところが、こと志とたがひ、病勢は次第に悪化し、劇痛はやまぬと云ふ状態になり、手術もラヂユームも無効となつた時、傍に添うて昼夜に看護せられる甲松さんに向はれ

て

『汝は偽孝者である。俺によく相談もしないで手術ばかりさせて、俺を狂ひ死にさせるのか！』

と、我身にたまりかねた愚痴と腹立ちの一杯をぶちまけて了はれたのでした。

これを聞かれた甲松さんは、これまでに父のために尽してゐるのに、父はこの心をわかつてくれないのか。もう世の中には神もない仏もないとなられて、手にかけてゐた珠数をパッと引き切られたのであります。その刹那に甲松さんの真暗い胸に浮び出たのが

『親鸞は父母の孝養のためとて一遍にても念仏申したることいまだ候はず。……』

の一句であつた。そして一楼の光明がさして来て、そのまま念仏にとけこまれたのであります。

一方福間さんは、甲松さんが珠数の糸を切つたので、四辺にパラパラと散る珠数玉のひびきに驚いて、いよ〳〵甲松も狂つた、怖しいといふので、重病者が起き上つて逃げようとした。そこで皆がよつてたかつておさへる、なだめるといふ大騒動の中にあつて、

『あゝ、医師ももう頼りにならぬ。妻子も、自分の身体も駄目…』

となられた時、

『自分はかねてから仏が救うて下さるといふことを聞かされてゐた』

といふことに思ひつかれると共に、動乱、煩悶、絶望の胸がスートひらけて行き、念仏に帰られ、後日に

『自分がたとへ病気がなほつて、大成功して見たところが、子孫のためにそれがよいことかわるいことか解つたものではない。然し今に及んで気付かして貰つた仏のまことひとつは世々に残つて消えることのない宝である。そのことを思ふと病気もまた幸福である』

と筆録して居られます。

福間氏一家の上に『仏が救うて下さる』といふことが徹到したのは、甲松さんの孝行の珠数の糸が切れ、久米吉氏が萬策つきて大爆発した、その時、間髪を容れずでありました。

『仏が救うて下さるのだ』といふ一事を、点滴の岩をもうがつ如く、倦まず、たゆまず、繰り返し、まき返し、告げに告げ、とどけにとどけて下さる。一度もこのことを耳にした者はやがて何時かは、拒むことの出来ない真実さをもつて、我身の無力さと、仏力の無窮に気づかされ、信心の華もそこにひらくのであります。『仏が救うて下さる』の一語、深く身にしむ実語であります。

近角常観先生の御一生を追憶して

福島政雄

夏期求道会

明治から大正にかけての頃、求道学舎で毎年の夏に夏期求道会といふ集りを催されました。それは一週間ばかりの集りでありまして、大てい教行信証の御講話を先生がなされ、また人生の実際問題と信仰との関係についてもお話があつたのでありまして、此の夏期求道会の御講話は殊に熱のこもつた懇切なお話でありました。大正三年の夏の求道会では信之巻の阿闍世王入信文についての御講話でありましたが、先生御自身が阿闍世王であるといふ御心持でありまして、お話は一語一語聴く人の胸にとほるものがありました。親鸞聖人の御言葉、「誠に知んぬ、悲しい哉愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑し云々」のところなど、先生は実に深くこれを御味ひ遊されたのでありまして、聴く人は今更のやうに自分の罪業深重、煩悩熾盛の姿に目がさめるのでありました。またその集りは各地方から集られた熱心な求道者に充ち満ちてゐましたので、座談会の時など皆が感動するやうな告白談がありました。

死刑囚、難波大助

先生が日本国の問題、個人の信仰の問題と相通ずる重大事として御考へになつたといふことの生きた例証としては大逆事件の死刑囚難波大助を御教化になつたことを挙げねばなりません。先生は幾度も難波大助に御逢ひはなつて懇切に信仰のことを御説きになつたのであります。それがどれほどに此の死刑囚に徹したかはなほ問題でありませうが、先生が後に広島に御いでになつて此の御経験を御話しになつた時、実に真剣なお話振りでありまして、先生が如何ばかり心をいれて難波大助を御教誨になつたかを察しあげることが出来るのであります。また島田三郎をも同様に御教誨になつたのであります。

句仏師問題

大正天皇崩御の年には、先生は数へ年五十七才に御なり遊されてゐたのでありますが、此の時を境目として全国に

信仰上の遊説をなされることは一旦おやめになりました。併しながら数年ならずして句仏上人の問題が起つたのでありますから、先生は決然として大谷派本願寺の改革のために立たれました。時は昭和四年でありました。それは本願寺が財欲のために腐敗しきつてゐるのを改革せねばならぬといふ御事でありましたが、同時に句仏上人の除籍問題を大問題として、子として親を裁くといふことは仏教の信仰上あるべからざる一大事であるとして、名文を正さんがために立たれたのであります。そのために先生はまた、全国を遊説して、御まはりになつたのであります。六十歳を超えられた先生が全国をかけての御遊説でありましたので、それは非常の御苦労でありましたが、先生は火のやうになつて遊説旅行を御つゞけになり、此の問題について非常に御苦心なされました。それが先生が病気で御倒れになる第一の原因となつたのであります。

脳溢血に

六十三歳の秋、十一月三日に広島文理科大学の講堂で十七条憲法を中心として熱烈な御講話をなされ、それから福岡県の方におまはりになつて御帰東遊されたのでありますが、その後一ケ月にして突然脳溢血でお倒れになつたのであります。先生を知る全日本の人々は驚愕してひたすら御回復を念じました。御静養の甲斐があつて凡そ一ケ年後には御立ち歩きになる程度まで御回復遊されましたけれども、右の御手はしびれて殆んど御かなひにならず、それから後の先生は誠にお気の毒でありました。先生が一筋に反対なされた宗教法案も議会を通過し、先生の御心配、日本国のための御痛心は深くなつたのでありますが、御健康は或る程度までの御回復に止り、求道会館にての御講話も、もはやむかしの御姿を見られぬやうになりました。

二河白道の人生

満洲事変が支那事変に転じて、御長男が南支に御出征になりました時、先生の御心配は更に加はりました。此の人生が二河白道そのものであるとの感じを深くなされました。二河白道の喩については、先生は以前から、これは比喩以上の比喩であると仰せられてゐましたが、今や御長男が戦陣の間に馳駆せられるやうになつて、水火相激する白道の人生といふことを、先生は痛感なされたのであります。その御長男は昭和十三年の十月一日廬山の戰において戰死なされました。これより後の先生は何とも云へぬ淋しい御心持で、いよ〳〵唯お念仏の生活を御つづけなりました。会館で御講話のあとで、御自分の御心持を御打明け遊されて、歎異鈔九章の心持であると仰せられました。先

生は決して空元気を出したりなさいませんでした。自然法爾の御心持で念仏唯一つの晩年を御過しになりました。併し句仏上人も御帰籍になり、此の点では先生も御満足になり、『春は自然法爾の中に到り、乾坤の万物順行通ず』と述べて御いでになりました。

示寂と戦争感

昭和十六年十二月三日、先生は求道学舎において御示寂遊されました。御発病以来満十年であります。その月の八日に大東亜戦争が始つたのでありますから、此の戦争は御存知なくて世を去りたまうたのであります。戰争に対する先生の御考へは、非戦主義ではありませんでした。時としては大に戦はねばならぬこともあると言つておいでになりました。併し勿論戦争主義ではありません。国と国との間にも国際的懺悔といふことがあるべきであると仰せられてゐました。一たび仏陀の平等大悲の光を身に受けた以上は相互に敵視する代りに相互に感謝し、衆生恩を感ずるのである、政党の軋轢も調和することが出来て、万国の平和も来すべきであり、閻浮八万四千城、干戈を動かさずして太平を致すといふ古人の詩があるとほり、此の地球上に大平和が実現せらるべきであると述べておいでになります。

浄土の返照

今や尽十方の無碍の光明と一味にならせられて、先生は如何に此の大戦後の日本国を御覧になつてゐるでありませうか。先生の令夫人は求道学舎の学生達から観音様のやうに仰ぎ慕はれたお方でありましたが、昭和二十年十一月十三日先生の御あとを追うて御往生遊され、先生の御令弟常音先生は終始一貫御兄上の御仕事の御内助を遊され、先生御往生の後には求道会館の講話を引きついで御いでになりましたが、昭和二十八年八月六日御往生遊されました。

お浄土は賑かになり、此の世は淋しくなりましたが、併しそのお浄土の返照はあの赫々たる夕焼雲のやうに此の人生を照されてゐます。近角常観先生の此の世における七十年の御一生は永遠の意義を持つてゐます。全く無我の御心持で親鸞聖人と御同様にたゞ弥陀の本願をお伝へになりますばかりの純一な四十ケ年の御活動、強さがあり、熱がありまして烈しさがあり、しかも久遠の静けさを心の底にお持ちになつた先生は、いつまでもこの世の光となり力となつて世を導いて下さるのであります。終戦後間もなく米国の指示によつて宗教法案は徹去せられました。色々の宗派や所謂新興宗教などもあります中に併し何となく仏教的である日本国民は今後においていよ〳〵先生の御精神によつて心の眼を開かれて行かねばならぬとおもふのであります。

（昭和三十年十二月十日稿了）

弟子と子

榊原德草

歎異鈔第六章に「我が弟子ひとの弟子」の爭ひについて聖人の仰せ出された御文に『親鸞は弟子一人も持たず候、その故は、わが計ひにて、ひとに念仏を申させ候はばこそ弟子にても候はめ、ひとへに弥陀の御催しにあづかりて念仏申し候ひとをわが弟子とまをすこと、極めたる荒涼のことなり云々』とある。

この頃、私はフト弟子とか子とかいふことが心に引ッかゝつてゐたのであつた。端的に言ふと師匠とか親とかいふことがチラホラ心に浮きつ沈みつしてゐたので、それがきつかけとなつて弟子とか子とかいふことを思ひ出してきたのである。もう一つほんたうのことをいつてしまへば、よき人の仰せによくも遭はせて頂いたことであると、年月のたつにつれていよ〳〵有難い思ひが滲みこんでくるからのことで、弟子とか子とかのことになつてくる原因も元を正せばこゝなのである。もうかう云つてしまへば大体の言はんとする所は言ひ得たのであるが少々思ふまゝを引き出して見ます。

私は歎異鈔第二章に於て聖人が『親鸞におきては、たゞ念仏して弥陀に助けられ参らすべしと、よき人の仰せかふむりて信ずる外に別の仔細なきなり』と仰せになる、その『よき人の仰せ蒙る』の御一言に向ふと私の感情は湧き立ち響きを受けるのである。丁度聖人のこの仰せが太陽とすると、私は畑の一隅に生へてゐるヒョロ〳〵した一本の草であるが、太陽の光を全身に受けて、それで呼吸を胸一ぱいに吸ひこみ吐き出して、こちらのいのちが動き出してくる。そんな感じである。

第二章の聖人は、ひとすじに好き人に信順しきつていられる、この信順が実は好き人の御いのちで、法然上人の生命がそのまゝ聖人の全身に新しきいのちとして輝いてゐる。このよき人と「仰ぐ聖人」と、又仰がれる「よき人、法然上人」との両聖人の一つになつた結びつきが私を腹一杯にさせるのである。

さて、この両聖人の間柄は師と弟子であるが、師とか弟子とかいふ言葉では余りにもぎごちない、そぐはない、実

は親と子との生命のつながりを拝するのである。

普通吾々が師匠と云ひ弟子といふ言葉を使つてゐる時は、こんな深い結ばれはない。踊の師匠、大工の棟梁、何々の師匠と弟子などの場合は、師匠から一定の期間その技術を習ひ学問を習つて了ふと弟子は師から離れて一本立になる、そして第二の師になる。こゝには「師」は当てはまるが「好き人」は当てはまらない、謂ふ所の師と弟子との関係は、あの有名な三つのもとどりの話、鎮西の聖光房のお話、あれが師と弟子の関係である。長い間法然上人の膝下に仏の教を学んでゐた聖光房が、いざ師の下を去つて行くとなると、その脊には負ひづる一ぱいの書き物である、これは師上人の御教への筆記である。師から吸ひとるだけ吸ひとつた獲物である。帰へる脊後から上人の御言葉によびとめられて「勝他・利養・名聞の三つのもとどりを断ち切らねば真の法師とは言へない」と言はれる。これが師と弟子の関係である。こゝでは師と弟子は師を自分の道具にしている、言葉は師でもその実自分を満足させるための手段に利用してゐるので、これでは真の師と弟子ではない。

又もう一つの場合。恭しく仕へる。師の下に或は山に薪をとり谷に水を吸む、身を粉にして師に仕へる弟子、その御師匠様、この関係である。禅の白隱禅師がその師正受老人に参じた場合この師弟の模様は何年も続いた。最後ともいふべきとき師弟の影が消えて真実の師弟即ち白隱禅師に於ては「よき人正受老人」となつたときである。その時は白隱は正受老人に村外れの野橋のたもとまで送られ此処で永く師と別れるのである。橋のたもとに立つ正受老人は大成した弟子白隱禅師に向つて「お前の大法宣布の偉觀を見たいが、私は老ひてゐる、もうその盛時に会ふことができぬ」といつて、はじめて涙を浮べて別れを惜しんだのである。薪水の労をはげみ仏道修行に身命を賭けた弟子が、何を尋ねても何年たつても「このなまくら禅坊主め」と叱鳴られるだけでとりつく島もない間はお師匠であるが、苦修何年、いつの間にか師の生命が通つてきて呵責の裏にまことの大慈悲を受得したとき、白隱は正受老人のお心を頂いた、それこそ正受老人を「正受」した白隱となつた、こゝで初めて只の師は「よき人」に一転する。師がよき人になるとき、弟子は親子の、その子の心で師を慕ひ仰ぐ、且又讃向し感謝して息まぬ。「よき人」が師に見られてくると師も弟子も一つになつてしまふ、これこそ「よき人の仰せ蒙りて信ずる」姿ではあるまいか。

御伝鈔第二段に『宗の淵源をつくし、教の理致を極めてこれをとき給ふに、たちどころに他力攝生の旨趣を受得し、あくまで凡夫直入の真信を決定しましけり』とある。

これは覚如上人の御筆による両聖人の面授口訣の荘厳な

る光景である。こゝにはよき人となつた時の活々とした有様が、手にとるやうに拝される。この場合、名は弟子でも、親と子の一つになつた姿である。

『親鸞は弟子一人も持たず候』とは、実は聖人は常によき人の中に一つになつて、よき人の外に何もなく、もし聖人に慕ひ寄る人々があつても、それは御自身の下に寄つてくるとは思はれなくて法然上人の仰の下に集つてくると感じていられる聖人だからではないだらうか。だから聖人に慕ひ寄る御念仏よろこぶ人々に向つて御同朋、御同行とかしづかれていられる。こゝでは、もう一つ上に親があつて、その親の子供たちになつていられる聖人である。この親は南無阿弥陀仏の親様でこの親様が三国七祖となり又これから後も永劫不断に沢山の子供たちを照し出し、産み出し、育て上げ、産みては育てて往生の一路を御浄土につれ帰つて下さる親様である。だから聖人は第九章に於てこの親様のは慈悲の中で温まつて、よいお顔をして唯円房と向ひ会つて『かくの如き吾等がためなりけり、と知られて、いよ〳〵たのもしく覚ゆるなり』と、われと御自分を指され、唯円房や私等を「等」とよばれて、共々親さまの子供である、と談つていられる、それがよき人聖人を通じて現にこゝに通うてくるではないか。

或は又、信行両座の争論の時も御師匠法然上人に最後の決判をお願ひする弟子達の訴へに対して、上人は「源空が信心も如来より賜りたる信心なり、善信房の信心も如来より賜らせたまひたる信心なり、さればたゞ一つなり」と仰せになるのである。こゝで私は法然上人は御自身の場合よりも若き御弟子なる善信の御房即ち聖人について「たまはらせたまひたる」と信心に変りなく一つであることを仰せられる中にも、深き敬ひをそのうちに慈愛の念をこめて、いかにも親と子とでも申上げたいやうな深い結ばれを感じるのである。恰も一寸したわが子の善行を喜び讃めたゝへてやまない母親の心が、この法然上人の御姿に仰ぎ見られるではないか。

おもふに、謂ふ所の師と弟子との関係は取り引きであつて、そこにはどこまでも五分々々根性が働いて居つて、師を師と仰ぐことができないのに対して、法然上人と聖人、聖人と唯円房、正受老人と白隠禅師、等のまことの師と弟子との間には、隔てるものが一つもない、師も弟子も如来さまのおまことの中に一座してしまつてゐる。即ち言葉を代へて云へば、吾がはからひによる関係が師匠と弟子の関係であり、如来さまのおはからひによるいのちのつながりとけ合ひよき人と仰ぐ弟子であり親様の権化のお姿なる御師匠さまである、この結びつきの師と弟子は親と子になるのである。又一面御同朋御同行である。お釈迦さまは信心喜ぶ人を好人なり妙好人なり吾々が親友なりと仰せになるのであつて、衆水の海に入りて一味となる如き、深きはる

かな結ばれ、一味の同行である。

『親鸞は弟子一人も持たず候、その故は、吾が計ひにてひとに念仏まをさせ候はゞこそ弟子にても候はめ、ひとへに如来の御催しにあづかりて念仏申し候ひとを吾が弟子と申すこと、極めたる荒涼のことなり』最初にあげた聖人の仰せを再び拝する。

吾が計ひによるのでなく、ひとへに如来の御催しにあづかつて念仏する弟子、この弟子が如来様の光明の中に照り映えてゐる御師匠さまのお姿を拝すると御師匠様は「よき人」とうつるのである。又この親様の御催しにあづからせて下さる先達のお方が「よき人」である。

要するに、『法身の光輪きはもなく』吾々盲目、瓦、石、礫のやうなこの身を照らしに照らして下さるその輝きを浴びた中に師と弟子は親子となつてしまふ。或は先きに導く者が先達であり後に導かれて往く者が後継者であるとすれば、この場合師も弟子も或る面からは前后の差こそあれ、同じ道を浄土に歩む已・今・当の往生人の替へ姿であるとも云へる。

噫！まことに、弥陀の本願まことにおはしますが故にこそ、我等如き瓦、石、礫と同様の、毎日々々お話にならぬ日暮ししか続け得ない者が、生をよろこび死を超えさせて頂けるのである。よき人に導かれる吾等に何のねうちもないこの身このまゝでその後に続かせて頂き御浄土の旅をさせて頂くのである。

子の母を憶ふが如くにて
衆生、仏を憶すれば
現前当来とほからず

如来を拝見うたがはず

御和讃に聖人は、如来を拝見疑ひなきことを断言される前に「子の母を憶ふが如くにて」と切々慈愛を籠めてお訓へ下されるではないか。子の母を憶ふ——子の母親を憶うて忘れ得ぬのは、しかしながら、子の憶ひの如何によるのでなくて、まこと母の海の如く広く且深き念ひが透つてくるからである、滲みてくるからである。だから母の前にはみな子の自覚がおのづから湧いてくる筈である。若しこのおもひがきささないならばそれは親子の結びでなくて他人様同志の角突き合ひと一寸も変らぬのである、どうして母の心に導かれることができようか。しかし吾等は、このお恥かしくて面にも裏にも現せない無慚無愧のこの姿に、われながら困じ果てんとするのであるが、そこがまことに不可思議の御手廻しにあづかつてゐるのであつて、親様は、これぞ吾が子に疑ひなし、と抱きとつて下さるのであります。これぞ『現前当来とほからず、』なのであり、『如来を拝見』するの時であります。

よき人の仰せに、ヂッと耳をよせる吾等は、弟子であつて、弟子でなく、まことに、親の前に立つよき子である、と申してもよいではないだらうか。

南無阿弥陀仏

（三一、二、二五）

ヂヤータカ物語

南伝大藏經

一、王様と波羅門

遙かなる遠い昔、印度のある村に一人の年若い波羅門僧が居りました。彼は世にも稀な秀でた容貌の持ち主で、そのうへ象の様な強い力を具へて居りました。そのため彼の心はとつおひつ動遙し

〃俺のやうなすぐれた者がこの世の欲望を捨てゝ修業者としての生活をして行く事は全く味気ない残念なことだ〃

と思ひ始めました。そして〃一そ今の生活を捨てゝ農業で暮しを立て、美しい妻もめとり、父母を養ひ、可愛い子も持ち、又世の中の為になる善行も積みながら平和にこの世を渡らうかしらん〳〵〃

とも考へましたが、又さま〴〵に思ひ迷うたあげく、

〃そんな一家を立てゝ一族のめんどうを見たり、なまじ世の中の幸福とか後世の安楽などというやうな事を考へたりしないで、一そのこと俺は一人山の奥へはいり、うまい鹿共を殺して自分だけの身を養ひ、勝手気儘に生きて行く事にしよう〃

と思ひ定めたのでありました。そこで彼は猟師としての武器に身をかためてヒマラヤの山深く入り、巌石で囲まれた谷間の洞窟を棲家として、力のあるにまかせて打ち獲つた鹿の肉を火にあぶつて思ふ存分食べて暮して居りましたが、ふとある時、

〃俺も何時迄もこの強さを失はずには居られまい。何時かは体が弱つて山の中を生き物を追うて駈け廻ることも出来なくなるだらう。今の内に色々の鹿をこの谷間へ追ひ込んで出口を閉じておいて、年老いて獲物を捕へる事が出来なくなつた時に、その鹿共を思ふまゝに殺して食べよう〃

と考へつきました。そこで沢山の鹿を谷間に追ひ込んでたくはへておきました。

かくて時は過ぎ去り、彼の身は老ひさらばうて行きました。あの若々しく美しさに輝いてゐた容貌も今は見るかげもなくおとろへ果てゝしまひ、手足の自由は失はれて一日中洞窟の中にうづくまり、眼は薄雲に蔽はれたやうにドンヨリとうつろにみひらかれて食べ物も飲み物も見えなくさへなつて行きました。又あのたくましかつた大きな体は萎れてみにくゝ皺一ぱいになり、たゞ一人力無く苦しみ悩まねばならなくなつてしまひました。

この頃、やはり印度のある国の王が、森の中で火であぶつた鹿の肉が食べたいものだ、と思ひ、寵臣に国をも与へてしまつて、たゞ武器のみを持つて山深く入り、鹿を殺しては肉を食べながら次第に右のヒマヤラの奥にわけ入つて来ました。そして屍の様なこの男の姿を見出して、怖れにおのゝきながら何者かと尋ね、又自分がこゝに来た訳を語りました。

それを聞いた彼は王に向ひ、彼がこの様になる迄の事や今の苦悩の有様をくはしく物語つて、

「王よ、私は敵の手に捕へられたやうに自分の凡悩のとりことなつて尊い法から遠ざかり、自分の快楽の為に他を苦しませ、遂に、遂にこの有様に堕ちてしまひました。今となつてしまつてはもはや取り返しがつきませぬ。

大王よ、あなたも儚い楽しみに迷うてせつかく人の世に受けたこの命を空しく過してはなりませぬ。早く王城に帰り、命ある間に尊い道を求め、正しい政治をお励みなさるやう。」

とねんごろにすゝめましたので王は悪夢から呼び覚された思ひで国に帰り、彼の教に従つて聖き法の道を修め、善政をしいたのでありました。

二、王様と闡陀羅

お釈迦様が遠い〳〵昔、かつて菩薩として道を修めて居られました時、当時印度で一番身分の低い者とされてゐた闡陀羅族に生れておいでになりました。その時の物語であります。

彼は青年に達し一家を立てゝ居りましたが、ある時その妻が

「私はみごもつて居りますせいかアンラの実が食べたくてなりません」

と云ひました。彼は

「今はアンラの実はないよ、他に何か酸つぱい果物を探して来てあげよう」

と云ひましたが妻は

「私はアンラを食べさへすれば生きてゐられますけれどあれを食べることが出来なければ死んでしまふでせう」

と云ひますので妻を深く大切なものに思つてゐた彼は、何とかしてアンラの実を手に入れて食べさせたいものだ。今時どこへ行つたらあるだらう、と思ひなやんで途方にく

れて居りました。

その頃国王のお庭にあるアンラ樹には何時も枝もたわゝに実が熟して居りました。思案に余つた彼はとう〳〵思ひ切つて王様のお庭のアシラの実を取つて来て妻の望みを叶へてやらうと決心しました。そして夜の更けるのを待つて王様のお庭に忍び込みアンラ樹に登り、暗闇の中で手さぐりで果実を探しながら枝から枝を伝うて居りましたが、その内に夜が明けてしまひました。そこで彼は、若し今おりて行つたなら番人に見付けられて捕へられるにちがひない。夜になる迄木の繁みの中で待つてゐるより他あるまい、と思つて絶頂まで登つて行つてかくれて居りました。

その時国王は婆羅門僧について経文を習ふため御庭の中に入り、彼が隠れてゐるアンラ樹の下で高い座に坐り、教師の僧を低い席に坐らせて教へを受けて居りました。彼は樹の上からこの有様を見て考へますのに

『この王は実に法を弁へぬ者だ。教へを受ける自分が高い所に坐つてゐる。又バラモン僧も法を知らない。彼は王にへつらつて低い座に坐りながら教へてゐる。そして、噫、私も亦真の道を知らない浅間しい者だ。女性への愛着の為に自分の命をもかへりみず、アンラの実を盗まうとしてゐるではないか」……

と。彼は遂に樹から降りて来て一つの垂れ下つた枝につかまつて二人の間に立ちました。そして

「大王様、私は滅んで居ります。あなたは愚なお方であられます。又その教師は死んで居られます」

と叫びました。国王は大変驚いて

「それはどういふわけか」

と問いますと、彼は歌を以て答へました。

すべて賤しき仕業なり
二人は法を弁へず
法を教ふるバラモンも
学ぶ王者も死せるなり

これを聞いてバラモン僧は第二の歌を唱へました。

かくすれば肉を混ぜたる最上の
サーリの飯を供せられ
我が生活は安らなり
さればわれ、修業者の法に従はず

これを聞いて彼は又次の歌を唱へました。

汝美食を得る為に
不法を行ふことなかれ

石もて瓶を破るごとく
法を破ることなかれ
バラモンよ、名誉を得
財を得ることに災あれ
こは、これ堕獄の行たればなり
非法の行たればなり

これを聞いて国王は非常に感動し

「お前は何種族の者か」

と問ひました。

「王様、私は闍陀羅でございます」

「お前がもしよい種族の生れであつたら、お前に王の位をも譲るであらうものを。しかしこれから以後、日中は予が王になるから、夜分はお前が王になるやうに」

と云つて自分の首にかけてゐた花環を彼の首にかけてやり、彼を都の守護者にしました。この事から都を守る人に赤い花環をかける風習が生じたと云ひます。

又この時以後国王は彼のいましめにしたがひ師匠への尊敬を行つて低い席に坐り敬虔な心で教へを聞く様になりました。

× × × ×

山崎哲三氏遺歌

わがために　われいまここにとよびたまふ
御名のみまへになみだぬぐはむ

たへまなき炎にくるうわがうへに
たまいる御名ぞ　うけまつらなむ

死ぬべしとおもひさだめて詠みはじむ
うたも妄執あはれ人の子

清水凡禿氏遺歌

みたされぬ者慕ひあひ唯涙
救ひのみ手のそこにありしか

進むとも退くもまた止まるも
よし苦は去らじ　み名称へかし

辞世

大願の舟はあわてる要もなし
ゆらるるままに　風のまにまに

昭和十七年十一月二日

編集後記

山も野も新緑に染められて、初夏のひかりが眼にしみる頃となりました。

眼に青葉、山ほととぎす、初鰹

と、芭蕉の心はこの新緑の中に躍り上つたことでありませう。

○

最近に耳をおどろかしたことは、スターリンの正体がさらされたことであります。鉄のカーテンの中で偶像化された独裁者の、このことは、ソ連の行方に何か大きな暗示が与へられたやうに思うのは私ばかりではありますまい。そして大きくうなづかされることは、矢張り同じ人間なので、自分が独裁的地位を得れば得るほど猜疑の心が深くなり、その疑心が暗鬼を作るという鉄則の外にはスターリンも出ることが出来なかづたということです。その萬人に取り囲まれつつも誰れ一人として心の許せぬ孤独さはいたましい華やかさでありました。

○

△近角先生の御一生の追憶、の原稿は終りました。福島先生に深く謝しまつることであります。私は昭和五年頃句仏上人問題で烈々火と燃えられる近角先生の御講話を京都でお聞き申しました。

『暗い部屋では何も見えぬが、灯火が一度点ぜられると、天井は上、床は下、と上下の秩序が見える。百万門徒の本山に信心のひかりがないためにかかる無秩序の動乱が生じたので、仏祖に対し奉つて申訳のない次第である』

『信界は必ず建現して秩序ある世界が開ける、これは自然である。そうでないならば悪人の救済ではなくて、悪人の許容である』

とも申されたと記憶して居ります。

△弟子と子、は榊原兄が近来の法味を頒つて下されたので、一読再読しては、仏法の上の師弟の縁は、父子兄弟の縁よりも厚いとある経典も思ひ出されました。

△ジャータカ物語は、二篇をのせました。老い行く身でありながらそをさとらず、何時までも死なぬかに振舞ふ身を省みさせられ、次は教の尊さを知る者は身分の貴賤を問はず真実の王であることを教へられます。

△仏が救うて下さるの稿は菅瀬師の語録から身にしみて感動させられたままに皆様に頒ちました。

御案内

福島先生講話会

六月十一日午后六時半

一道会館、市電新郊通一丁目

廿七日の第四日曜は午前岡崎別院の同朋会館、午后は藤川町の林福寺で光和会に参ります。

定価　一部　十七円（送共）
　　半年　百円（送共）
　　一年　二百円（送共）

名古屋市南区駅上町二ノ二八
編集・発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　奥川正生
名古屋市南区駅上町二ノ二八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光　第八巻第五号昭和三十一年五月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可